

寄稿 学生部セミナー チェコ(プラハ)・ハンガリー(ブタペスト)の旅



▲世界遺産・プラハの街並み

3月8日から13日まで学生部セミナーが実施され、中世以来の歴史が今も息づくチェコとハンガリーを20人が訪れた(引率含む)。日本企業の進出が進む中、歴史の重みと現代の動きを実感してきた参加者から、体験記が寄せられた。

- あこがれのミュシャ作品に感激 池田絵莉子(文3)
- 現地学生と時を忘れて語り合う 吉田匠吾(文3)

【ニュース専修4月号9面】

寄稿 学生部セミナー チェコ（プラハ）・ハンガリー（ブタペスト）の旅

あこがれミュシャの作品に感激 池田絵莉子(文3)



▲プラハ城正門(左端が池田さん)

東欧に興味のある私にとって、今回の訪問は大きなチャンスでした。社会主義から資本主義に変わり、どのような変化が見られたのか、自分の目で確かめてみたかったです。

首都プラハでとても印象に残ったのは、聖イジー教会のステンドグラスです。パイプオルガンの音色も手伝って、その美しさはとても神秘的でした。その中にかの有名なアルフォンス・ミュシャが作ったものがあります。以前からミュシャの絵が好きで、これを見ることが旅行目的の一つでもあった

ため、感動もひとしおでした。そしてカレル橋の聖人像、そこから眺めるブルタヴァの流れからはまさに歴史の重みを感じました。

企業訪問ではアサヒビールのチェコ・プラハ社を訪れ、実際にビールが作られる工程を間近で見学しました。ここでは欧州各国への輸出用「アサヒスーパードライ」を作っており、試飲させていただきました。味は日本のものとは少し違うように感じました。ボヘミアングラス工場の見学では、その美しさと精巧なカットに圧倒されました。

街自体が世界遺産に登録されているプラハは本当に美しかったです。しかし、郊外に出ると国の中の経済格差が感じられました。島国日本と内陸国チェコとの違いや、自分が感じたこと、思ったことは今後の私に大きな影響を与えてくれたと同時に、良い思い出を作ることが出来ました。

- あこがれのミュシャ作品に感激 池田絵莉子(文3)
- 現地学生と時を忘れて語り合う 吉田匠吾(文3)
- 寄稿 学生部セミナーのトップへ

【ニュース専修4月号9面】

寄稿 学生部セミナー チェコ(プラハ)・ハンガリー(ブタペスト)の旅

現地学生と時を忘れて語り合った 吉田 匠吾(文3)



▲ブタペストのマーチャーシュ教会(上も)での吉田くん

このセミナーに参加した目的、それは「ヨーロッパ」という世界を自分の目で見るということでした。私は西洋史を専攻していますが、実際にヨーロッパに行くのは初めてだったので、チェコ、ハンガリーでの5日間は驚きと感動の連続でした。

ハンガリーのブタペストは、夜景が非常に美しい街で、その夜景を見た瞬間、7時間に及ぶ列車移動の疲れはどこかへ吹き飛んでしまいました。ライトアップされたブダの王宮やマーチャーシュ教

会、漁夫の砦、くさり橋などは、今思い出しても目頭が熱くなるほどの感動を与えてくれました。

またカーロリ・ガシュパールカルビン派大学の日本学科学生との交流会・懇親会もとても貴重な経験となりました。彼らは日本に大きな興味を抱いています。私たちは日本で生活を説明し、お互いの趣味や好きな音楽について時間を忘れて語り合いました。

日本とまったく違う文化に触れ、またそこで生活している人々と触れ合ったことで、「世界」に対するあこがれが一層強くなり、今後の大学生活でさまざまな経験をしたい、という気持ちにさせてくれました。

- あこがれのミュシャ作品に感激 池田絵莉子(文3)
- 現地学生と時を忘れて語り合う 吉田匠吾(文3)
- 寄稿 学生部セミナーのトップへ

【ニュース専修4月号9面】

海外研修・国際交流奨励制度を利用して 豪州タウンズヴィルでの日本語教育を学ぶ 仲野 美弥(文3)

たくさんのhumanityに触れた2週間

豪州タウンズヴィルでの日本語教育を学ぶ 仲野 美弥(文3)



▲4年生の生徒たちと

昨年度、日本における日本語教育について学び、今度は海外における日本語教育について知識を得たいと思い、1月29日から2月13日まで海外研修・国際交流奨励制度を利用して、オーストラリアのタウンズヴィルに行ってきました。

タウンズヴィルはケアンズから南に約300キロの小さな商業都市です。市内には日本の小学校にあたるPrimary schoolと中学・高校にあたるHigh school合わせて30校近くの学校があります。今回、その中から小・中・高一貫校のRyan Catholic College(以下Ryan)で日本語の授業に参加することが出来ました。

全校生徒約1,700人、そのうち3分の1程度の約600人が日本語を学習しています。日本語教師は専任が2人、兼任が1人で、タウンズヴィルの中ではかなり日本語教育が盛んな学校です。

現在、タウンズヴィルでは日本語教育を見直す学校が多く、特にPrimary schoolで新たに日本語の授業を設置するところが増えているようです。ただHigh schoolでは、授業が主に選択制になり、日本語を学習する生徒の数は減っているため、学校側では専任の日本語教師を雇用することも出来ず、通信教育(インターネット・電話)に頼る形になってしまうそうです。

言語の「表面」を学ぶ楽しさ

Ryanでの日本語の授業は、驚きの連続でした。どの学年の授業でも、生徒1人ひとりがとても楽しそうに授業を受けていて、何よりも日本語という言語の表面にあるものに大変興味を持っているのです。

日本語の表面にあるもの、言語そのものではなく、日本語を話す人々(=日本人)、やその人々が住む国(=日本)、そしてその国の持つ文化のことです。私たち日本人は英語を学ぶ時に、英語を話す人々、その国の文化や習慣について学んでいるのでしょうか。生徒たちがとても楽しそうに日本語を学習出来る理由は、言語の表面に触れる大切さを理解しているからだだと思います。そして、そのことがどの言語においても学ぶ上で一番大切なことなんだと、強く感じました。



▲Ryan Catholic Collegeの日本語の先生たちと(右端が仲野さん)

「こんにちは」に励まされ

訪問中、自分の言いたいことを上手く表現出来ないことが何回もありましたが、そんな時、いつも心の支えになったのは生徒たちからの英語なまりの「こんにちは」と感謝の言葉でした。

最後の週末、ホストグランドマザーと食事をした時に『humanity』(親切・人間性)を大切に。どんな時にも、だれに対しても、どんな物に対しても『Humanity』を持つことを忘れてはいけない」と教えてくれました。

タウンズヴィルでの2週間は、日本語教育を通してこの『humanity』にたくさん触れることが出来ました。

【ニュース専修4月号9面】